茶ぐわ～ゆんたく 160

燃料を送る道路

左上の写真は、喜友名のシオン幼稚園前の通りです。急な坂のある場所で、反対車線の車や人が見えづらくなっています。実は、戦前ここに道はなく、畑が広がっていました。戦後、なぜ道になったのか分かるのが左下の写真です。道路上に白い建物があります。これは、バルブボックスです。戦後、米軍は燃料送油管（POL・パイプライン）を主要な各基地間に敷設しました。数年後、地中化した際の点検用の建物で、数百mごとに道路上に建てられていました。現在は返還されて見ることはできませんが、当時の状況をシオン幼稚園の裏の標識とパイプライン通りの地名が物語っています。

【問合せ】市立博物館 ☎870-9317

▲どこにでもある住宅地を抜ける道路、この先が急な坂道になっています。

▲現在も残るパイプラインが敷設された時のコンクリート標識「軍油線道路　許可なき車の通行を禁ず」とあります。

▲パイプラインに付属するバルブボックス1991（平成3）年パイプラインは、喜友名と伊佐の堺付近で合流し、軍用1号線に沿いに浦添・那覇を通っていました。

ぎのわんの歴史・文化遺産を歩く －其の33－

今月は、平成二十七年度末に返還された西普天間住宅地区で現在実施している埋蔵文化財発掘調査について速報としてご報告します。

遺跡の内容

西普天間住宅地区内には、国指定史跡である喜友名泉をはじめ、多数の遺跡が所在しています。今回報告するのは、普天間旧道跡という戦前まで使われていた道の遺跡です。

この道は普天間から喜友名、伊佐、大山へ続く道であり、昭和二十年に撮影された米軍の航空写真でもはっきりと映っています。

調査が始まり、米軍の造成土を取り除くと石灰岩の切石を両側に並べ、その間に小さな石を敷き詰めた当時の道がほとんど改変されずに残って居ることが判明しました。

両側の切石は道の縁石として配置しており、これに沿うように外側には溝が掘り込まれていることが分かりました。これは恐らく道に集まる雨水などを流すための側溝としての機能があったと思われます。また、道の中央部がやや盛り上がった形状を呈しており、これも道の外側に水が流れていく構造となっています。

さらに、旧道上の北側には、レールを固定するための枕木と鉄釘が発見されました。宜野湾市史によると、サトウキビ運搬用のトロッコがあったということで、これは軽便鉄道の大山駅まで続いていたそうです。

調査はまだ途中ですが、今後は旧道の構造を把握し、道に付随する施設や隣接する集落等との関連性、当時の土木技術および工事方法や考え方等を調査、整理してその成果を発掘調査報告書に取りまとめていく予定です。

【問合せ】文化課 893-4430